

# 日本語の接續表現「ものの」の構文をめぐって

## —「が」構文との比較を中心として—

金 勝 漢\*

### 目 次

- |                    |
|--------------------|
| I. はじめに            |
| II 「ものの」の 主節の 文末表現 |
| III 「ものの」の 從屬節     |
| IV 「ものの」の 意味特徴     |
| V. 終わりに            |

## I. はじめに

日本語で接續の職能が託されているものには、用言の活用形、接續助詞、接續詞などがある。

例えば、

- (1) 新聞を読み、世論の動向を知る。
- (2) 新聞も讀むし、ラジオも聞きますよ。
- (3) 新聞を讀む、だから世論の動きに詳しい。

のように、(1)の動詞の連用形「読み」、(2)の接續助詞「し」、(3)の接續詞「だから」が接續の職能を擔っている。

その他にも、名詞が形式化<sup>1)</sup>して接續助詞のようなはたらきをしているものがある。

\* 人文大學日語日文學科 (Dept. of Japanese Language & Literature, Cheju Univ., Cheju-do, 690-756, Korea)

1) 寺村秀夫、「日本語のシタクと意味Ⅱ」, くろしお出版, 1984, pp. 184~216 参照。

寺村は、「從屬節のテンス, アスペクトポ」の項で、

(例) 會社に問い合せたところ、そんな人間はいないという事だった。

「ところ」のように、被修飾名詞が、もともと持っていた實質的な意味を失い、あるいは實質的な意味が關係的、抽象的なものに變化し、その他の語との結びつきかた、つまりシタクティック面だけで名詞としての特徴を保っている場合、これを「名詞の形式化」と説明している。

(4) あしたは子供の日なので、学校は休みです。(接續の表現, P. 15)

(5) 新憲法によって初めて地方自治の理念が導入されたものの、戦前の中央集権を許容する意識は残った。(朝日新聞「以下、朝日」, 88, 5, 20)

(4) で、先行要素と後行要素をつなぎ合わせる役割をしているのが接續助詞「ので」である。先行敘述内容「あしたは子供の日だ」と後行敘述内容「学校は休みだ」は、「ので」のはたらきによって、より大きな素材群を結成して陳述成分の素材になる。

一方、(5) の場合、先行敘述内容「新憲法によって初めて地方自治の理念が導入される」と後行敘述内容「戦前の中央集権を許容する意識は残る」をつなぎあわせて、より大きな素材群を結成して、陳述成分の素材を作る役割をするのが「ものの」である。

(4) の「ので」と(5) の「ものの」は、先行要素と後行要素をつなぎ合わせて大きな素材群を結成している。また、「ので」と「ものの」によって結成された素材は陳述成分の素材になる。このように「ので」と「ものの」の文の中での職能は同じであると思われる。

つまり、「ものの」は接續助詞のように用いられている。

本稿では接續表現「ものの」の意味と構文の特徴について考察することにする。

「ものの」は接續助詞「が」と似ているところが多いと思われる。そこで、「ものの」を考察する一つの方法として、「が」構文と比較してみる方式を取った。

## Ⅱ. 「ものの」の主節の文末表現

接續助詞は先行要素と後行要素を繋ぎ合わせる役割をしている。接續助詞が従属節と主節をつなぎ合わせる時、接續助詞による「主節の文末表現の制約」がみられる。

接續助詞によって、「主節の文末表現」が制約される現象は、その接續助詞の文法的な特徴によるものであると考えられる。

この場合、文法的な特徴というのは、その接續助詞の勢力が主節の文末の、どの部分まで及んでいるか、ということである。

例えば、

(6) 温暖化の犯人として太陽光、地熱、風力を利用する新エネルギーと原子力はシロ、天然ガスは灰色、石油、石炭はクロだが、石油は二十一世紀もエネルギーの主流を占めるだろう。

(朝日, 89, 10, 29)

のように、接續助詞「が」の文末には推量系の表現「だろう」が現れるが、接續助詞「のに」の場合は、推量系の表現とは共起しにくい<sup>2)</sup>。

2) 金勝漢, “接續助詞「が」「のに」の意味・用法をめぐって”『上智大學・國文學論集』24號, 上智大學國文學會, 1991, p. 126.

「のに」の文末には現れていない推量系の表現が、「が」の文末に現れるのは、「が」の勢力がもともと文末の推量表現まで及んでいるからであろう。

## 2. 1. 推 量

(7) 一人で出るとはいうものの、時間がかかるだろう。

(8) (ハワイでは----) 外国人による不動産投資の規制法案を出した。審議未了で廃案になったものの、もともと日系人が多く、対日感情も悪くないハワイで、こうした法案が出されたこと自體、日本人の投資態度が反省を迫られているあらわれといえよう。(朝日、88. 5. 4)

(9) 「小石せんせい。」

ひと月ぶりの聲をきくと、ぐっと體に力がいり、「はい。」と答えたものの、風はその聲をうしろのほうへ持っていたようだ。(二十四の瞳、ポプラ社、P. 30)

「ものの」構文の文末には「～だろう、～よう、～ようだ」のようなものが現れる。

しかし推量の意味を表している「～間違いない、～かもしれない、～まい、～そうだ(様態)」などの表現は「が」構文の主節の文末には現れているが<sup>3)</sup>、「ものの」構文の主節の文末に現れる用例は見つからなかった。これは「ものの」構文の接続範囲が「が」構文の接続範囲よりも狭いことを意味していると思われる。

## 2. 2. 當 爲(主張)

(10) (エネルギー自給率) 日本は81%と漸くイタリア並みになったものの、エネルギーの基礎盤は脆弱と言わざるを得ません。(AERA, 90. 2. 27)

(11) 金はないものの、子供は教育しなければいけない。(接続の表現、P. 62)

(12) 日本へのビザ發給の遅れを不満とする中國人が、上海の日本總領事館に押し掛けたのはつい先月のことだ。日中間の話し合いでとりあえず鎮靜化してはいるものの、抗議行動は、日本側の受け入れ態勢にも問題があることを突き付けるものだった。

(讀賣新聞「以下、讀賣」、88. 12. 28)

(13) (小口預金金利の自由化措置) これにより従来のように公定歩合の上下だけに連動する規制金利から脱するものの、各金融機關が自由に金利を設定するわけではない。

(日本經濟新聞「以下、日經」、88. 12. 12)

(14) 日米兩政府はこれまで、國內市場規模や外國系半導體の對日供給額の算定手法では一致したものの、米IBM自社内製品を外國系と扱うかどうかで日米間の食い違いが残ったためだ。(日經、91. 5. 31)

當爲(主張)を表す「～ざるを得ません、～なければなりません、～ものだ、～わけではない、

3) 金勝漢、前掲論文、pp. 127~129.

～ためだ」などの表現が「ものの」の主節の文末に現れる。このような、當爲を表す表現は「が」の文末にも現れる。

また、「～が」の文末には、「～たい、～てはどうだろうか、～てほしい、～てもらいたい」などの希望の表現や、「～てください」などの命令の表現があらわれるが、「～ものの」の文末には希望（勧誘・要求）と命令の表現が現れる例文はみつからなかった。

「Ⅱ」をまとめて圖示すると、次のようである4)。

文末表現 接續助詞	推 量	希 望	命 令	當 爲
が	○	○	○	○
ものの	○	×	×	○
のに	×	×	×	×

### Ⅲ. 「ものの」の 從屬節

#### 3. 1. 丁寧語「ます體」

(15) 昨日まであちらこちら探しましたが、どうしてもその家が分かりません。

(文法Ⅰ・助詞の諸問題1, P. 250)

(16) 瀧廉太郎は日本の生んだ名作曲家で、二十四才の若さでなくなりましたが、「荒城の月」「箱根の山」など、いつまでも人びとの心に残るすばらしい曲を作っています。

(文法Ⅰ・助詞の諸問題1, P. 250)

(15.16) は、從屬節が「ます體」形になっている「が」の例文である。

ここで、「が」とともに逆接の用法に用いられている「ものの」を「が」の代わりに置き換えてみると、

(15) \*a. 昨日まであちらこちら探ましたものの、どうしてもその家が分かりません。

(16) \*a. 瀧廉太郎は日本の生んだ名作曲家で、二十四才の若さでなくなりましたものの、「荒

4) 金勝漢, 前掲論文, pp. 126~132. 参照.

「のに」構文は本稿では取り扱わなかったが、参考のために表にいった。

城の月」「箱根の山」など、いつまでも人びとの心に残るすばらしい曲を作っています。のように、(15a.16a)はともに非文になる。しかし、(15.16)で、「ます」を取り除くと、(15)b. 昨日まであちらこちら探した {が、ものの}、どうしてもその家が分かりません。(16)b. 瀧廉太郎は日本の生んだ名作曲家で、二十四才の若さでなくなった {が、ものの}、「荒城の月」「箱根の山」など、いつまでも人びとの心に残るすばらしい曲を作っています。のように、適格文になる。これは「が」の從屬節には「ます體」形になることができるが、「もの」の從屬節には「ます體」が現れることができないことを意味しているだろう5)。

從屬節の中に、「ます體」が現れる接續助詞には「が・けれども・と・から・し・たら・のに・て」などがある6)。

### 3. 2. ムード

(17) 朝から考えているのだが、どうもわからない。  
 (18) (韓國の南北關係) (冷戰の) 壁を乗り越えるにはまだ時間がかかりそうだが、その水位が上がり始めたのは間違いない。(朝日、89. 2. 3)

(17.18)は共に「が」の例文であるが、その從屬節にはムード表現である「のだ」と「そうだ(様態)」がそれぞれ現れている。(17.18)で「が」の代わりに、逆接の用法に用いられている「もの」を置き換えてみると、

- (17) \*a. 朝から考えているなもの、どうもわからない。  
 (18) \*a. (冷戰の) 壁を乗り越えるにはまだ時間がかかりなもの、その水位が上がり始めたのは間違いない。

のように、非文になる。しかし、「が」の從屬節のムード表現を取り除くと、

- (17) b. 朝から考えている { が、もの }、どうもわからない。  
 (18) b. (冷戰の) 壁を乗り越えるにはまだ時間がかかる {が、もの}、その水位が上がり始めたのは間違いない。

のように、(17b.18b)の両方共に適格文になる。つまり、「が」の從屬節にはムード表現が現れるが、「もの」の從屬節にはムード表現が現れることができない。

このような現象は、「もの」の語構成とも関係があると思われる。「もの」は形式名詞「もの」に連體助詞「の」が付いて、接續助詞的に用いられてはいるが、まだ名詞としての性質も残っている7)。「もの」の從屬節にムード表現が現れないのは、連體修飾節にムード表現が現れないことと同じ現象であろう。

5) 実際に雑誌や新聞の用例を調査してみても、「もの」の從屬節に「ます體」が現れている例文は見つからなかった。

6) 盧顯松, “從屬句における對者敬語”「國語學・研究と資料」第13號, 1989, p. 2.

7) 此島正年, “接續助詞「もの」の語群”「湘南文學」15, 東海大學日本文學會, 1981, pp. 13~16 參照.

### 3. 3. 引用句

(19) ここは静かだとはいうものの、買い物にも不便だ。 (接續の表現, P. 62)

(20) 一人当たりの國民所得が米國を抜いたとはいうものの、日本人の生活水準は米國人のせいぜい七割程度だといわれる。 (朝日, 88. 8. 30)

(21) 消費税創設の代わりに物品税などが廢止され、所得税も減税されたとはいうものの、納税者として納得できることではない。 (朝日, 89. 4. 9)

「ものの」の用例を調べてみると、(19~21)のように、從屬節に引用句「~と(は)いう」が用いられている場合がよく見られる。

引用は、ある發言が別の發言を報告するというタイプのものである<sup>8)</sup>。引用が話し手の發言ではなく、他者の發言を報告するということであるから、状況を客觀的に表現しようとする意圖が含まれていると思われる。「ものの」の從屬節に引用の形式がよく用いられているというのは、「ものの」に状況を客觀的に伝える意味が含まれているからであろう。

特に、新聞の社説やTVのニュースなどでは、「が」は、あいまいな認識を示した文章をもたらしやすい缺點を持っているので<sup>9)</sup>、「ものの」が多く用いられているのであろう。

### 3. 4. 節の包含關係

南不二男は、「現代日本語の構造」で、日本語の從屬節を「A・B・C」の三つの類に分けている<sup>10)</sup>。

南不二男の分類によると、

#### (1) Aの類

「~ながら(繼續)、~つつ、~て、~連用形(形容詞・形容動詞)」の形のものがある。

#### (2) Bの類

「~ので、~たら、~ても、~と、~なら、~のに、~ば、~て、連用形」の形のものがある。

#### (3) Cの類

「~が、~から、~けれども、~し、~て、~連用形」の形のものがある。

のようになる。

また、從屬節の包含關係には、

(1) Aに屬するある從屬句の一部になることができるのは、やはりAに屬する從屬句である。

(2) Bに屬するある從屬句の一部になることができるのは、やはりBに屬する從屬句か、または

8) 砂川有里子, “引用文における場の二重性について” 『日本語學』9月號, 1988, p. 14.

9) 安本美典, “接續助詞「が」の文章心理學” 『月刊文法』9月號, 明治書院, 1970, p. 112.

10) 南不二男, 『現代日本の構造』, 大修館書店, 1982, pp. 114~131 參照.

Aに属する従属句である。

- (3) Cに属するある従属句の一部になることができるのは、やはりCに属するものか、あるいはAまたはBのものである。

のような規則がある。

南不二男の分類では、従属節「ものの」は、「A・B・C」の類のどちらにも属していない。「ものの」はどの類に属するものであるかを調べることにする。

- (22) (インドネシア) 八十年代後半までは石油暴落や外資政策の整備に手間取り、タイやマレーシアに遅れたものの、九十年代から外資誘致規模などで主導権を取り返している。

(日経, 91.8.6)

(22) では連用形「手間取り」が、「ものの」の一部になっているが、「連用形」は「A・B・C」の三つの類ともに属しているものである。従属節の包含関係の規則からみると、(22)の「ものの」は「A・B・C」のすべての類に属する可能性がある。

「ものの」の属するところをはっきりするためには、「Cの類」が「ものの」の一部になっている例文を検討する必要があると思われる。

- (23) 切符をもらったから来るには来たものの、たいしておもしろい映画でもなかった。

(外国人のための基本語用例事典, P. 1030)

(23) では、「から」が「ものの」の一部になっている。「Cの類」を一部にすることができるものは、やはり「Cの類」しかない。「から」が「Cの類」に属しているから、「ものの」も「Cの類」に属することになる。

しかし、「Cの類」の従属節にはムードの表現が現れることができるが<sup>11)</sup>、「3. 2」で、明らかにされたように、「ものの」の従属節にはムードの表現が現れることができない。

したがって、「ものの」は「Bの類」と「Cの類」の間に属するものであると考えられる。

#### IV. 「ものの」の意味特徴

「ものの」の實例を検討してみたら、「ものの」の用法は大きく二つに分けられていることに気がついた。それを、「A1 ~ものの、~ A2.」と「A ~ものの、~ B.」と示すことにする。

##### 4. 1. 「A1 ~ものの、~ A2.」

###### 4. 1. 1. 不充分

11) 南不二男, 前掲書, pp. 128~129.

「4.1」の構文は、従属節の叙述内容「A1」と主節の叙述内容「A2」を「ものの」が繋ぎ合わせている構造を成している。この構文では求められている目標「A」があると思われる。その目標は文の表面には現れていないが、その文の主語（動作主體）が目指していることを推し量ることはできる。

例えば、次の例文で、

- (24) 日本は一人当たりの国民総生産がアメリカを抜いたとはいうものの、住宅の質の面で、米國の水準に遠く及ばない。(朝日、88. 3. 29)
- (25) 少年非行は、ほんの少しずつ減ってはいるものの、なお高い水準にある。(讀賣、89. 4. 2)
- (26) (90年総選挙) 自民黨は、勝ったものの、参院での劣勢は変わらない。(AERA、90. 3. 6)

(24～26)の主語のそれぞれの目標は「日本人の生活水準がアメリカを抜くこと」、「少年非行が減ること」、「参院で優勢になること」である。

その目標の中で、一應達成された部分は叙述内容「A1」として、従属節に示される。まだ達成されていない部分、即ちまだ足りない部分は叙述内容「A2」として、主節に示される。その足りない部分がもし達成されれば、主語の目標「A」が完全になうことになる。

「4.1」の構文の意味は、書き手、または話し手が考えている目標にはまだ及んでいないことである。

つまり、「A1～ものの、～A2。」構文は「不充分」であることを示している。

#### 4. 1. 2. 評 價

「A1～ものの、～A2。」構文は、評價面においても、共通的な特徴が見られる。

まず、従属節の評價を調べて見るために、(24～26)で従属節だけを独立させてみると、

- (24) a. 日本は一人当たりの国民総生産がアメリカを抜いた。
- (25) a. 少年非行は、ほんの少しずつ減ってはいる。
- (26) a. (90年総選挙) 自民黨は、勝った。

のようである。(24a～26a)の評價は「+」である。「4.1.1」で明らかにされたように、「4.1」構文の従属節は目標としていたことなかで、その目標が既に達成されたことであるので、評價的にも「+」になっている。

次は、主節の評價について調べて見よう。

- (24) b. (日本) 住宅の質で、米國の水準に遠く及ばない。
- (25) b. (少年非行) なお高い水準にある。
- (26) b. (自民黨) 参院での劣勢は変わらない。

(24～26)の主節である(24b～26b)は、内容的に三つ共に不充分であることをあらわしているので、その評價が「-」になる。



從屬節の評価が「+」、主節の評価が「-」であるので、

「A1 (+) ~ものの、~ A2 (-) . .」

のように表すことができる。

#### 4. 1. 3. 主 語

(24) c. 日本は一人当たりの國民總生産がアメリカを抜いたとはいうものの、(日本は) 住宅の質の面で、米國の水準に遠く及ばない。

(25) c. 少年非行は、ほんの少しずつ減ってはいるものの、(少年非行は) なお高い水準にある。

(24・25) を (24c・25c) のように、主節に從屬節と同じ主語である「日本」「少年非行」をそれぞれ補ってみても、文の全體的な意味には變わりがない。

「A1 ~ものの、~ A2 . .」構文は、從屬節と主節は同一主語になる。同一主語であるからこそ、意味的にも從屬節である程度達成した事柄を述べておいて、その主節で主語の目標がまだ不充分であることを述べるができると思われる。

#### 4. 2. 「A~ものの、~B.」

「4.2」の構文は、從屬節の敘述内容「A」と主節の敘述内容「B」を「ものの」が繋ぎ合わせている構造を成している。「4.1」の場合は、主語が目指している目標「A」の中で、既に達成された部分を從屬節「A1」に示し、まだ達成されていない部分を「A2」として主節に示した。だから、主節「A2」の足りない部分が満たされれば、主語(動作主體)が目指している目標「A」はかなうことになる。

しかし、「A ~ものの、~B.」の構文は、書き手がある事柄(A)を從屬節に述べた後、その從屬節の敘述内容に対する意見が主節「B」に述べられている。「A ~ものの、~B.」構文においての從屬節「A」と主節「B」との関係は、「4.1」の從屬節「A1」と主節「A2」との関係ほどは密接な関係ではない。

「が」と「ものの」は、似ているところの多い接續表現である。それで、すでに研究されている「が」の用法を基にして、「ものの」の意味を考察することにする。

日本國立國語研究所の「現代語の助詞・助動詞 一用法と實例一」には、接續助詞「が」の用法と實例が挙げられている<sup>12)</sup>。その用法を挙げてみると、

- 1) 二つの事がらをならべあげる際の、つなぎの役目をする。共存または時間的推移。
- 2) 題目・場面などをもち出し、その題目についての、またはその場面における事がらの敘述に接續する。そのほか、種じゅの前おきを表現するに用いる。
- 3) 補充的説明の添加。

12) 日本國立國語研究所、「現代語の助詞・助動詞一用法と實例一」、秀英出版、1952。pp.19~27 参照。

4) 内容の衝突する事がらを對比的に結びつけ、前件に拘束されずに後件が存在することを表す。  
(既定の逆接条件)

5) 推量の助動詞について、その事がらに拘束されない結果を導く条件を表わす。  
(假定の逆接条件)

となっている。

日本國立國語研究所の用法分類を簡単に整理してみると、

(1)共存 (2)時間的推移 (3)題目・場面の説明 (4)補説 (5)逆説 (6)前置き  
ということになる。

この「が」の用法の6項目を基にして、「ものの」の「4.2」構文の意味用法を検討することにする。

#### 4. 2. 1. 時間的推移

時間の流れに沿って、事態の推移を示すものである。

(27) (アキノ政権の反対勢力) 「黄色い革命」をいっしょに闘ったものの、その後、大統領の政治姿勢を強く批判し、たもとを分かっていた。(AERA, 90. 4. 3)

(28) (富士の裾野の水異變) それが七五年には十二萬トンにまで減り、一時持ち直したものの、最近はまだ二十萬トンを下回っている。(AERA, 90. 6. 19)

(29) 森氏は金融業者から資金をかき集めて株を買い占め、株をつり上げたものの、賣り抜けに失敗、今年一月下旬、行き詰まってしまった。(AERA, 90. 5. 22)

この場合、時間的推移を表す言葉が從屬節と主節の間に現れる。(27)の「その後」、(28)の「最近」のような時間的推移を表す言葉が用いられている。(29)の場合も、「～つりあげた、(その後)、～行き詰まってしまった」のように、「ものの」の代わりに時間的推移を表す言葉である「その後」を入れることができる。

時間的推移を表す表現は「その後」以外にも、「すると、それにつれて、そうしていると、そのうち、その結果」などの言葉を「ものの」の代わりに入れ替えてもいい場合がある。(13)。

#### 4. 2. 2. 題目・場面の説明

題目・場面が從屬節に提示され、それが主節において、説明される用法である。

(30) 黨首會談に限らず、先の臨時國會での首相答辯は言葉遣いは丁寧なものの、その内容は官僚が作ったメモの範囲を出ていない。(朝日, 87. 12. 27)

(31) これまでの自民黨はスキャンダルが発覺する度に改革の決意を誓ったものの、それは單なる

13) 伊藤勳, “接續助詞「が」の用法”『日本語學校紀要』10, 國際學友會, 1986, pp. 89~90 参照。

作文に終わり、實效があがらないようなことを繰り返してきた。(朝日, 89. 5. 21)

(30) は「題目の説明」であり、(31) は「場面の説明」である。その從屬節の題目と場面を示す指示語が主節に現れる。(30.31) の主節の指示語「その・それ」の代わりに、從屬節に示されている題目と場面を入れ替えると、

(30) a. 首相答辯の内容は官僚が作ったメモの範囲を出していない。

(31) a. スキヤンダルが発覚する度に改革の決意を誓ったことは單なる作文に終わり、實效があがらないようなことを、これまでの自民黨は繰り返してきたとなる。

「題目・場面の説明」の用法は、指示語が文面に出てこない場合もあるが、「その・それ」のような指示語が文面に現れることによって明瞭化する。

#### 4. 2. 3. 補 説

この用法は主節の内容が從屬節の内容を補足することになるか、または從屬節の内容に付け加わることになる。

(32) (証券会社の損失補填) 準大手、中堅証券の損失補填額は合計四百三十六億圓と大手証券と比べ少なかったものの、損失補填先は三百八十法人、六個人に及び、廣範に損失補填が行われた事實を裏付けた。(日経, 91. 8. 4)

(33) 長壽の條件は生まれながらの健康體や個人の健康維持の努力はあるものの、むしろ大半は周圍の者の氣配りや支えによると考えた方がよいと思います。(朝日, 88. 9. 14)

(34) (企業収益) 來年度も増益率は鈍るものの、三年連続の増益決算になるとの見方が大勢だ。(讀賣, 89. 1. 21)

この補説は、從屬節の事柄だけでは物足りないところがあるので、もう一つの事柄を主節で示している。

#### 4. 2. 4. 逆 説

逆説(逆態)というのは、先行敘述内容によって示される事態を條件として、むしろ豫期されないう事態が成立するという、因果關係を示すものである<sup>14)</sup>。

つまり、二つの事態の矛盾を示すものである。

(35) (全國高校野球地區豫選) 東北地方、新潟などで雨の影響を受け、開幕豫定の岩手が全試合中止延期になったものの、全國で34地區、304試合が行われた。(讀賣, 91. 7. 18)

(35) で、從屬節の「試合が中止延期になること」と主節の「試合が行われること」とは、互

14) 渡邊實, 「國語構文論」, 塙書房, 1971, p.289.

いに矛盾している事柄である。

「が」の逆説用法では、二者の行動・状態の相違を対照させるために、

「～は ～だが、～は ～だ。」

のような構文に示される場合があるが<sup>15)</sup>、「ものの」にも同じ対照を表す用法がある。

(36) 非製造業でも、商社や金融サービス業などは利益をあげているものの、不動産事業は過大な投資負担で収益が悪化するケースも相續している。(日経、91. 7. 23)

(37) 「小石せんせえ。」

ひと月ぶりの聲をきくと、ぐっと體に力はいり。(小石先生は)「はーい。」と答えたものの、風はその聲をうしろのほうへ持っていたようだ。

(「小石先生は」筆者注) (二十四の瞳、ポプラ社、P. 30)

(36.37) は、「～は ～であるものの、～は ～である。」構文になっているので、二つの事柄を対照を示すものである。

「が」には、共存と前置きの用法があるが、「ものの」の場合は、實例を調べてみても、「共存と前置き」の用法は見つからなかった。

## V. 終わりに

「ものの」構文の意味・用法の分析を試みた。考察した結果をまとめてみると、つぎのようになる。

- (1) 「が」構文は、「推量・命令・希望(勧誘・要求)・當爲(主張)」などの表現が主節の文末に現れるが、「ものの」構文の主節の文末には、「推量・當爲」の表現しかあらわれなかった。
- (2) 「が」の從屬節には「ます體」「ムード表現」が現れるが、「ものの」構文の場合は そうではない。このような現象は「ものの」の語構成的な面とも関係がある。
- (3) 南不二男は、日本語の從屬節を「A・B・C」の三つの類にわけているが、「ものの」構文は、「B類」と「C類」の間に屬するものである。つまり、「ものの」構文は、從屬節の述語部分の要素からみれば、「B類」に屬するものであり、從屬節の包含関係からみれば、「C類」に屬するものである。
- (4) 「ものの」構文の意味特徴としては、「A1～ものの、～ A2。」と「A～ものの、～ B。」に示すことにした。  
「A1 ～ものの、～ A2。」構文の場合は、「不充分」であることを表している。  
「A ～ものの、～ B。」構文の場合は、「時間的推移、題目・場面の説明、補説、逆説」などに分けてみた。

15) 日本國立語研究所、前掲書、p. 23.

## 参 考 文 献

- 渡邊實, 「國語構文論」, 塙書房, 1971
- 横林宙世・下村彰子, 「接續の表現」, 荒竹出版, 1988
- 日本國立國語研究所, 「現代語の助詞・助動詞 一用法と實例一」, 秀英出版, 1951
- 益岡隆志・田窪行則, 「基礎日本語文法」, くろしお出版, 1989
- 寺村秀夫, 「日本語のシンタクスと意味Ⅱ」, くろしお出版, 1984
- 寺村秀夫(日本國立國語研究所), 「日本語の文法(下)」, 大藏省印刷局, 1982
- 鈴木忍, 「文法Ⅰ(助詞の諸問題1)」, 日本國際交流基金, 1978
- 南不二男, 「現代日本語の構造」, 大修館書店, 1982
- 日本語教育學會編, 「日本語教育事典」, 大修館書店, 1982
- 文化廳, 「外國人のための基本語用例辭典」, 大藏省印刷局, 1975
- 金勝漢, “接續助詞「が」「のに」の意味・用法をめぐって” 「上智大學・國文學論集」24號,  
上智大學國文學會, 1991
- 安本美典, “接續助詞「が」の文章心理學” 「月刊文法」九月號, 明治書院, 1970
- 伊藤勳, “接續助詞「が」の用法” 「日本語學校紀要」10, 國際學友會, 1986
- 盧顯松, “從屬句における對者敬語” 「國語學・研究と資料」第13號, 1989
- 此島正年, “接續助詞「もの--」の語群” 「湘南文學」15, 東海大學日本文學會, 1981
- 砂川有里子, “引用文における場の二重性について” 「日本語學」9月號, 1988

<국문초록>

## 일본어 접속표현 「ものの」의 구문에 대하여

김 승 한

일본어의 「ものの」는 신문·잡지등에 주로 많이 사용되는 접속표현이지만, 아직 이에 대한 연구는 거의 이루어지지 않고 있다. 따라서, 이 논문에서는 「ものの」 구문의 의미와 용법을 고찰하였다. 그 연구방법으로서는, 「ものの」와 비슷한 점이 많은 접속조사 「が」와 비교고찰하는 방식을 취했다.

「ものの」 구문의 의미와 용법을 정리하면 다음과 같다.

- (1) 「が」 구문은, 「추량·명령·희망·당위」 등의 표현이 주절의 문말에 나타나지만, 「ものの」 구문의 주절 문말에는 「추량·당위」의 표현만 나타났다.
- (2) 「が」 구문의 종속절에는 「ます체」 「추량표현」이 나타나지만, 「ものの」 구문의 종속절에는 「ます체」 「추량표현」이 나타나지 않는다. 이러한 현상은, 「ものの」의 어구성적인 면과도 관계가 있다.
- (3) 南不二男는 일본어 종속절을 「A·B·C」의 세 유형으로 나누고 있다.  
「ものの」 구문은 「B유형」과 「C유형」의 사이에 속하는 것이 된다.  
다시 말하면, 「ものの」 구문은, 종속절의 술어 부분의 요소로 보면, 「B유형」에 속하게 되고, 종속절의 포함관계로 보면, 「C유형」에 속하게 된다.
- (4) 「ものの」 구문의 의미 특징으로서는, 「불충분」과 「시간적 추이, 제목·장면의 설명, 보충 설명, 역설」 등으로 나눌 수 있었다.